

私の好きな色

早藤青里

ピンク。

私が最初に好きになった色。

「女の子はピンク」という刷り込みからか。何度も読んだ絵本の表紙の色だったからか。大好きなアニメのキャラクターのトレードカラーだったからか。きっかけは分からないが、物心ついたときから好きだった。

しかし、私はこの色と突然、今生の別れをした。突然好きになってはいけなくなってしまう。

いや、本当は私が好きにならないことにしたのだ。

ある子が言った。

「ピンクが好きなのはぶりっ子なんだよ。だからピンクを好きになっちゃいけないんだよ」「じゃあ、何色を好きになればいいの?」

「黄色」

みんなピンクが好きだったはずなのに、その時にはすでに一人残らず黄色が好きになっていた。幼稚園の年中から年長になったら、一番好きな色はピンクではなく黄色にしなればならない。誰が決めたのか、何が始まりだったのかはわからないが、私の知らないところでそういう「きまり」が出来上がっていた。

そのことを告げられた瞬間、私の中で感情が激しく燃え上がった。好きでいることを突然咎められ奪われた。抗いたくても抗えない。記憶に残る限り初めて味わった途轍もない怒りと悔しさ。それは全身を覆い尽くし、そのエネルギーで疾走し飛び跳ね地団太を踏んだ。

……何に対して抗えなかったのか?

今思えば、私は戦ってすらいなかった。ただ一人でわけのわからない迷信に従い、勝手に憤っていただけだ。まるで強風の中一人で踊るかのよう。

周りを怖れてか、抗うということを知らない無知だったからか、変に真面目だったからか、私は仕方なく、けれどあっさりと、その時から黄色を好きになることにした。無理にでも貫き通せばよかったものの、心の中では激しい反抗心を抱きつつも、大人しく従った。まだ幼稚園児というのに強固なコミュニティ。

社会をよく知らないはずなのに同調圧力に屈する潜在意識。
おそろしい。

こうして私はいつの間にか黄色が好きなのを受け入れていた。いや、本当に好きにな
っていたかはわからない。「まあ好きかもね」くらいかもしれない。その情熱はピンクに
対するものには及ばない。

「黄色が好き（でも本当はピンクが好きなんだけどな……）」と、隠しているうちに、そ
の気持ちを奥の方に追いやりすぎて、いつしか小さくなって消えかかってしまった。

そして、「本当はピンクが好きなんだけどな」がいつの間にか「ピンク……ぶりっ子の
色……昔好きだった色」になった。

これ以降だったか、いつからだだったか、私は素直に好きなものを好きと言えなくなって
いた。それを「好き」と言った瞬間に、自分がそれに見合うかどうか審査されている気が
するようになってしまった。自分はそれを好きと言って許されるのだろうか。好きと言う
資格があるのだろうか。自分に似合うだろうか。これなら好きと言って納得してもらえ
だろうか。そんなことばかり考えてしまう。「心」よりも「目」が先行する。好きと思っ
ても感情が疾走することはなく、はじめの一步を踏み出しかけても進むことすらできず、
好きかどうか考え込んでしまう。わからない。わからない。本当に好きかどうかもわか
らない。何が好きかもわからない。

こうしてピンクは面影だけを残して私の中からいなくなった。わけのわからない存在も
になった。